ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと〝風〟

第165号（２０２０年２月）

白井啓治

(四) 桜咲いたよ梅はまだかいな

『里山に白梅の一人静かに』

沖縄からの便りがあった。こちらは桜が咲きましたよ、そちらは梅が咲きましたか、というものであった。所変われば とは言うが、桜と梅では汗疹と霜焼の違いである。

先の土曜日、難台山の麓に出かけたら、雨に凍えながら梅の花が咲いていた。冷たい雨の里山の梅の古木にポツンポツンと咲いている白梅は実に風情を感じ良いものであった。この侘び寂のような里山の静寂を沖縄に伝えてやろうかと携帯電話を取り出し、メールを打とうとしてやめた。桜の花吹雪だよ～ん、なんて南国特有の明る過ぎる返事が来ては堪らんと思ったからだ。暗いのが好きなわけではないが、この里山の静寂な気分は掻き回されたくなかったからである。

暮れからあまり雨の無い日が続いたのであったが、このところ数日雨が続いた。インフルエンザが流行っているようだから、恵みの雨といえそうである。インフルエンザの予防には湿度が一番なのだそうだ。

そういえば小生、湿った煎餅布団に包まって寝ているせいなのか、この十年ほど風邪らしい風邪を引いていない。家人がインフルエンザに罹り高熱で寝込み、家中にウイルスをまき散らしていても全くうつらない。動物園のチンパンジーのようにネギを齧っているわけではないが、幸いなことに風邪をひかない。何とかは風邪をひかないというから、どうやら小生は当にその何んとかなのであろう。

（絵：兼平ちえこ）

最近、石岡市の旧八郷地区によく足を運ぶのであるが、筑波山、足尾山、加波山、吾国山、難台山に囲まれたこの盆地はまほろばの里と呼ぶにふさわしい美しい場所である。霞ヶ浦を囲む沿岸の豊かさとこの穏やかな盆地を見ていると、遥か古人が「常世の国」と表すしかその表現の言葉が見つからなかったのであろう事は容易に察せられ、私自身もそう思ってしまう。

国衙跡を擁する旧石岡市街地を歴史の里と思っている人も多いが、どうしてどうして国衙跡等常世の国から眺めれば所詮は新興住宅地。太古の歴史に想えば常世の国は霞ヶ浦沿岸とそれに繋がるまほろばの盆地であろう。（2009年２月５日）

（本稿は故白井啓治氏が常陽新聞に2008年７月より約１年間に亘り掲載されたエッセイを載せています。）

《ふるさとの風に呟いて…》

（２００６年）

・初春に想う　夢に紡いで希望の紡いで
　命のあるのを

・初夢に妹の舞う姿　愛し

・春の風に舞う妹の恋歌

・初夢にあらわれし妹の舞い愛し

・ひびけ心の音　とどけ心の声　妹に

・音の言葉を失って笑みの言葉する母九十一歳

・老母　つぶらの瞳に微笑んでござる

・首振りのたてとよこ　声のなくした老母との会話

・寒波に寒椿も首をすぼめた

地域に眠る埋もれた歴史（58）　　**木村　進**

【石岡市内の社寺紹介】

・木造十一面観音立像

若宮八幡宮から少し戻って石岡小学校（国府跡）へ曲がる信号を反対方向（北）に進んで1本通りを渡って路地を進むとそこに木造十一面観音立像を保存している堂がある。あまり人の通りは無い狭い道ですがここには室町時代から続く「長法寺」というかなり大きな寺（子供がその縁の下を立って歩けるくらい）がありました。現在の「若松町」という地名は、昔、この寺の名前を取って「長法寺町」と呼ばれていました。しかし江戸時代の宝永年間（1704-1711）に縁起の良い名前に変えることになり若松町に改名されたといいます。しかしこの長法寺（長法寺、長宝寺とも書く）と言う寺はその後もありましたが、明治3年の出火で焼失してしまいました。

この火事は「長法寺の火事」と呼ばれており、若松町・青木町・香丸町・仲の内町・金丸町・中町の500戸に延焼し、烈風のため、矢口本陣や新地八軒（鈴の宮神社横）なども焼失してしまったといわれています。しかし、この寺が無くなっても「石岡のおまつり」では若松町はしばらくの間（明治後半から昭和初期）「長法寺町」として年版表に載っています。

★　木造十一面観音立像

観音立像は像高141㎝。制作年代は室町時代と思われ、ここにあった長法寺に保存されていたと考えられています。近年、この仏像の修理が行われましたが、その際、慶長16年と明治17年にも修理が行われていることが判明しました。

木造十一面観音立像（県指定有形文化財）

慶長16年の修理は六郷政乗の孫である六郷政慶の命により行われていました。出羽国の出身である六郷氏が佐竹氏と入れ替わりで府中に入ったが、すぐに出羽国に戻っており石岡市内ではあまり記録が残っていない。

★　馬頭観世音碑

お堂の横には「馬頭観世音」の大きな石碑があり、奉納した馬車組合というむかしの名前が書かれています。江戸時代には府中（石岡）は各方面から色々な荷物が集まってきていました。笠間方面から来ると国分寺近くや今の泉町辺りで市場が開かれており、柿岡方面からはこの長法寺周りで市場が開かれていたのではないかと思われています。

昔はこの地が町の入口部にあたり、宇都宮への街道筋になっており、境内も広く、相当に盛んであったようです。石岡は国府時代から馬の集散地であり、全国の馬の産地より多くの馬が集められたといいます。市内には馬に関係した地名も数多く残っており、馬を持った者はこの長峰寺観音へお参りに来て、笹の葉を買って帰るのが慣わしであったそうです。しかし荷馬車が運搬の主体であったのは、昭和30年頃までであり、その後はトラックに代わって行きました。また、長峰寺には「買出し場」というところがあったという。米の産地である山根地区（柿岡地区）の良米を馬の背に2俵積んで（このため2俵で1駄という）石岡の町へ運んだ。その時、町の入口であるこの地にできた「買出し場」で、米の品評や商談が行われた。それにより、この周りには、馬方茶屋などの休憩所などが多くでき賑わい、秋には連日数百頭の馬の列ができたという。買出し場はここ以外にも市内では国分町にもあり、陸前浜街道に沿った米の産地から米がたくさん集まったので、米穀商が軒を並べていたという。（明治20年頃から明治の終わり頃まで続いたという）

（24）宝持院（ほうじいん）

染谷地区の住宅の中に寶持院がある。寶持院の正式名称は金剛山蜜巌寺寶持院という、真言宗豊山派のお寺である。

本尊は聖観世音菩薩。文安元年（1444）2月、宥辯上人の開基とされる。

何回かの火災にあい京保17年（1732）高根台の地から現在地に移転した。

府中城主皆川山城守の弟の墓がある。

（25）染谷鹿島神社持院

染谷地区の寶持院の隣に神社への入口鳥居がある。少し進むと二の鳥居があり、木立の間に神社が見える。創建は不詳でだが、武甕槌命(たけみかつちのみこと)を祭る古い歴史を感じさせる。豊受姫命・市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）・足仲産命・気長足姫を併せ祀っている。北方には土塁が巡らされた。嘉永六年(1854)十一月十五日修営（神主小松長門）の棟札がある。境内には境内社として「八坂神社」と「清心神社」が祭られている。清心神社の例祭日(祇園祭)(10/15)に神輿の渡御がある。

また、境内の後方には、猿田彦命・金山彦・御嶽山・山国狭槌尊の石碑が点在しており、この神社の信仰の歴史を感じることが出来る。

天保十四年（1843）建立の鳥居

（26）染谷薬師堂（古墳）

常陸風土記の丘から東に海洋センター前を通過して右に曲がらず、そのままっすぐ進むと小高い小山があり、頂上にお宮があります。地元にあった地区内の地図には「薬師堂」と書かれています。

書物にもあまり出ていないがどうやらこれが「染谷古墳群薬師堂古墳」と呼ばれるものらしい。常陸風土記の丘公園の入口に「染谷古墳群」の看板が出ており、公園周辺台地に方墳3基、円墳29基、不明9基などの古墳が分布しています。木々の中に古墳が眠っているようなのですがこの林の中に入って行ってもすぐに古墳は見つかりません。

しかし、その古墳群の中で一番大きなものがこの古墳（染谷27号古墳（円墳：径40m、高さ4m））です。これが染谷古墳群の一つだなどと、現地にはどこにも書かれたものはありません。

薬師堂（古墳の上に建てられた）に上ると、周りにはたくさんの墓や石像が置かれています。そこに彫られた年代は「天保」「享保」など江戸時代のものばかりです。

写真の奥の方（南側）は大乗妙典の碑がある方面で、近くに「宝持院」と「鹿島神社」があります。これらも古くいわれのある寺院です。そして、その先が「池袋」という地名です。これは東京の池袋などと同じ名前の由来だと思います。また、「染

谷」という名前が気になりますが、はっきりしたことはわかりませんが、かなり昔に近くの恋瀬川の川岸に染物業の人たちが住んだことに由来すると思われます。昔、龍神山は村上山といったようです。そして麓の村を村上と言いました。龍神山の上にお宮を立て、麓に神社を建てて祀りました。村上神社です。でも村上村からこの染谷村が別れました。

江戸時代はこの二つの神社は龍神社と呼ばれ、今は佐志能神社と呼ばれています。

我が労音史（15）　木下明男

20代に参加した労音運動は、1970年からは労音の中心活動家として参加しています。そして、労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の中から学んだ内容を記述していきます。

1985年の社会情勢と音楽状況

米ソ首脳がジュネーブで軍縮会議開催。ソ連の共産党書記長チェルネンコが死去しゴルバチョフが後任に就任。西独のヴァイツゼッカー大統領が敗戦40周年記念にナチス批判の名演説を行う。中曽根行政改革によりNTT, JTが発足し、つくば市で科学万博が開催。厚生省が「エイズ」患者第一号を確認。日航ジャンボ機が御巣鷹山に墜落し、520名が死亡（人気歌手の坂本九が亡くなる）。男女雇用機会均等法が成立し公布。都心部の時価が前年比53.6%に高騰しバブルの始まりか？

ショパンコンクールに日本人が25名参加し世界の話題になる。文化団体連絡会議の招きでイタリアの勤労者の文化・体育サークルの連合組織アルチ（ARCI）の代表が来日。ＮＨＫがＦＭ番組でクラシック関係の放送が半分以下に減少。「反核日本の音楽家たち」でオムニバス・オペラを上演。芥川也寸志のオペラ「広島のオルフェがモスクワで初演された。ＣＤの普及が本格化して、前年には国内の生産数が2900万枚となる。スピーディ・ワンダが国連で熱唱。アフリカ飢餓救済のコンサートがロンドンで開催「ウイ・アー・ザ・ワールド」を大熱傷。80ヶ国に発信。青函トンネル貫通。

この年に逝去された音楽家・文化人は、高橋慎一・立川澄人・坂本九・中野好夫・野上弥生子・石川達三・浦山桐郎・笠置シズ子・E.ギレリス・R.ストック・シャガール・チェルネンコ（ソ連書記長）・

1985年の労音の動き

第33回総会が労音会館で開催。組織の実態を分析し、弱点の克服するための課題と方針を討議した。

現状と問題点：例会総種目83例会のうち、自主例会32・地域例会11・買取例会40（昨年は総種目96例会のうち、自主例会43・買取例会53／その前は自主例会58・買取例会83）この分析で自主例会の減少が分かる。組織面ではサークル数の減少と臨時会員の増加が顕著である。また、各地域委員会の力量が低下し、円滑な運営が行われていない、そのため海外演奏家シリーズ例会や自主例会の組織が減少している。これらの実態克服のための課題と組織方針が出された。

課題：1）年間登録会員を20000人、登録サークル2000、登録委員300人、「月刊音楽」400部固定。

2）行政地区ごとに地域委員会の確立、大ブロック委員会の指導体制強化。

3）例会ニュース配布網の確立。（各地域委員会ごとに）

組織方針：1）重点例会は、全地域・全サークルの協力連携により、そのすべてを成功させる。

2）地域委員会は、地域例会を企画し、サークルや地域の音楽要求を実現させる。地域例会は、その地区に於ける大小の会場を使い、創意と工夫で財政還元を図り地域財政の確立をする。

3）労音のない職場や団体に、例会紹介を通してサークル作りを働きかけ、労組等を協力団体として組織する。

また、休刊していた機関紙「ひびき」に変えて、「代表者ニュース」として不定期発行する。更に、経費削減のために専従体制を縮小し、3人の事務局員にする。これは、事務局依存の活動形態を克服し、委員や運営委員による自覚的な活動に改善をしていく。また、組織にとって最も大切な機関誌の停刊は、運動を大きく後退させるものであることを確認し、早急な復刊の方針を決めたが改善されなかった。

第九例会では、指揮者の石丸寛氏を審査委員長に、柴田睦陸・五十嵐喜芳・岩井宏之と労音の代表を審査員としてソリストを公募し、オーディションにより「木ノ江友吏子（S）羽根田宏子（S）玉敷やよい（MS）白石邦憲（T）櫻井直樹（B）」5人を選び、2回の公演を成功させる。また、

1000 名以上が参加した例会は、中村紘子（P）ダンタイソン（P）高橋真梨子・河合奈保子・美輪明宏・ハイアイセット・ナターシャセブン・谷山浩子・民族アンサンブル「ドゥルジバ」・ボリィショイバレェ学校・第九等です。

例会活動取り組みの特徴は

1）地域例会は（杉田二郎・伊藤敏博・高橋竹与・張暁輝・中国音楽・白鳥英美子・統一劇場《花かご》・ナターシャセブン・河島英五・横井久美子・きたがわてつ）これらの例会が成果を上げる。

2）海外招聘企画は、ソ連の各共和国選抜のドゥルジバ（民族音楽と舞踊）やモスクワボリショイバレェ学校の実現は、日本のバレェ界に影響を与えた。

3）要求度の高いポピュラー音楽は、各事務所による自主公演が優先されるために、大ホール公演は演奏家

が限定され困難さが増している。

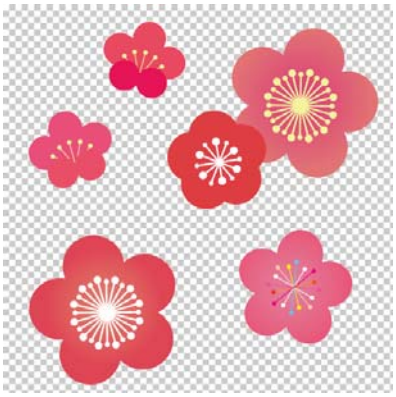
この年の秋に予定されていた、スペイン国立歌舞団は演目の大幅修正があり、各地から公演の見通しが立たず中止せざるを得なかった。

例会外の活動として、スキー友好祭（上越国際スキー場）は各地域から350が集まり交流を深めた。夏の友好祭は、関東労音と共催で富士の西湖で200名が集まり、今崎暁巳（ルポライター）の講演と映画「橋のない川」の上映、各地労音からの出し物で楽しみ、サークル活動の経験交流で友好と連帯を深める。この年にモスクワで開かれた世界青年学生友好祭に代表を送った。全国から12労音が関東の川越に集まり、信州交流会が開催される。主催の川越労音から、秩父音頭と八丈太鼓で開幕し、「秩父事件100年」の記念講演（中沢市郎氏）が行われ「歴史は若者の手で創られる」と、強調され感銘を受けた。

第31回全国労音連絡会議は、64団体207名が参加し労音会館で開催された。継続して例会に参加する固定会員制度（聴き続ける会員制）に取り組んでいる実情と実績が報告された。（労音の主人公は会員だと言う自覚と意識、音楽を通して人間的交流を深める）共同企画についても取り組みの経験交流や成果について討議が深められた。討議は、大合唱・クラシック例会・ポピュラー例会・聴き続ける会員制度・自主企画と共同企画・自治体と労音活動・サークル活動等7つの分科会に分かれ討議された。

海外招聘演奏家は、ターリヒ弦楽四重奏団・全ソ連邦選抜民族アンサンブル「ドゥルジバ」・ダンタイソン（P）・マイケルルディ（P）・ベネチア室内オーケストラ・カンマーゾリスデン（ドレスデン）が招聘された。冬のモスクワ芸術祭に14名を派遣、全国会員数49000名。

つづく



石岡市指定文化財（十九）

兼平智惠子

石岡市ふるさと歴史館に於いて令和元年十一月七日から令和二年二月二日まで行われていました「舟塚山古墳とその時代」の企画展は“新聞で知りました”“興味があるから”等、沢山のご来館を頂きました。

舟塚山古墳は大正十年に国の指定文化財となり、その後約九十年余り、この巨大な墳墓の被葬者は？、何かと注目を浴びながら大切に大切に保存されてきました。

今回の企画展では平成二三～二五年にかけて、地中レーダー探査と物理探査によって、後円部墳頂には東西十四m、南北六mの長大な埋葬施設と考えられる木棺を粘土でくるんだ「粘土槨」と考えられるものが、そして前方部墳頂では東西八m、南北に二・五mの埋蔵施設の反応が得られました。これらによって埋蔵施設や被葬者像、築造時期に関する手がかりが得られ報告されていました。

舟塚山古墳を中心とする、舟塚山古墳群は恋瀬川左岸の霞ヶ浦を望む台地上に現在までに四十一基が確認されています。

こうして古墳時代前期から（四世紀）終末期（七世紀）の長期に渡って石岡は古墳が築造されましたが七世紀後半になりますと現石岡市田島、貝地の地に、古墳群を築造した勢力が郡衙・郡寺を造営する一翼を担ったと考えられています。

「諸国毎家　作仏舎　乃置仏像及経　以礼拝供養」（諸国の家ごとに仏舎を作り、仏像及び経を置き、礼拝供養せよ）　これは天武天皇が、天武一四年（六八五）三月に出した詔で、天皇は皇后の病気平癒を祈願して薬師寺の建立を発願するなど仏教

への信仰が厚くまた仏教による護国を推進していました。
常陸国（六四六年今の茨城県ほとんどが常陸国として誕生）でも十一あった郡ごとに寺院（郡寺）が建立されるようになり仏教文化の幕開けであり、これまでの古墳時代の終焉を意味する事になります。
今回の文化財紹介は、十一の郡の中の茨城郡に建立された茨城廃寺跡、茨城廃寺礎石をご案内いたします。

茨城廃寺跡　貝地二丁目
史跡
平成二四・三・二一指定

茨城廃寺礎石一号・二号・三号・四号
国府五―九―三（平福寺）
昭和五五・六・二七指定
有形（考古資料）

茨城廃寺礎石五号
貝地二―一七
昭和五五―六・二七指定
有形（考古資料）

茨城廃寺礎石六号
国府六―二―三（清涼寺）
昭和五五・六・二七指定
有形（考古資料）

茨城廃寺礎石七号
国府六―二―三（清涼寺）
昭和六〇・一一・八指定
有形（考古資料）

先ず茨城廃寺跡は石岡駅より徒歩で十五分位です六号国道に向かい、国道との交差点真っ直ぐに渡り、間もなく左にコンビニ、進むと右に平等寺、目の前に信号のある丁字路？？？、いいえ、この信号交差点は六号国道貝地交差点へつながる通称高浜街道との交差で変形交差点になっています。進んできた道から高浜街道渡ると左よりに、およそ民家に入っていきそうな曲がりくねった細い道を百ｍぐらいで到着、説明板がお待ちしています。
昭和五四～五六年（第一・二・三次調査）に発掘調査が行われ、塔跡・金堂跡・講堂跡が確認され、「法隆寺式伽藍配置」であることが判明。出土遺物として、豊富な瓦や和同開珎、そして「茨木寺」と書かれた墨書土器の出土によって「茨木寺」と呼称されていたことで茨城郡の郡寺であったことが明らかになりました。
第四次調査が平成二三年～二四年行われました。主に寺院地の東西の規模、西端～北東の距離一五六ｍなど遺跡の範囲と内容を確認。
第五次調査は平成二六年に行われました。東側区画溝の確定・掘立柱建物の発見。
今後の調査計画は、寺域の南側・伽藍地の区画施設の解明となっております。
尚茨城廃寺の路盤ではないかと注目されている石が、ばらき台団地に入る信号のある交差点左手にある万福寺の左側の畑に、きんちゃく石と書かれた立て札の元に鎮座しています。
次に茨城廃寺礎石につきまして、この礎石は円柱座造りをもつ古い形式で茨城廃寺の主要建物の土台に使用されたもので礎石の五号につきましては、貝地二丁目、小目代公民館と田島薬師堂ふたつ並んでいる手前、一段低い所の角に風化も感じられず美しい円形に加工された礎石が鎮座していました。
その他一号から七号の礎石は、平福寺、清涼寺の境内に大切に保存されています。

参考資料　石岡市の遺跡・舟塚山古墳とその時代
企画展記録集

○　初登山落ち葉に石ころ木の根かくれんぼ
智恵子

御留川をきれいにしよう

伊東弓子

御留川を一周出来た事で、
「よく続いた。偉いぞ。頑張ったね」
と、自分達に褒美をあげたい思いだ。
無事に終ろうとしている事に感謝の気持を込めて、塵拾いをする事にした。玉里に隣接する沖洲の“ほほえみの丘”から、高浜の“山王川”の橋迄の八キロの堤防を行く事にした。
今回の思いの中にはある人との会話があった。
歩く会始まってまもなく「この活動その物の姿がはっきり見えてこないね」という指摘を受けた。

確かに私自身もどう進めていくかは不安の中だったが。
「汚れている霞ヶ浦の塵拾いも取り入れていきたい」と、言った事を覚えている。その時の思いも含めて実行しようと、今回取り組んだ。
　玉里では先駆けだったKさんの経験を思い、お願いに上ったが、頑張ってこられた方への仕打ちは余りにも冷たいものが多く、特に役所の壁は厚かった。又、これから一緒にという時、伴侶を亡くされた事は大分打撃を受けておられた。今は他の事で活動してお忙しい毎日に“幸あれ”と、願って無理強いは遠慮した。
もう一つのグループ“しみじみの村の会”の活動の人達に指導して頂く事にした。第二、第四日曜日の朝の活動がある日にも拘らず、私達への日程に合わせて頂いての協力だった。会員のメンバーは玉里出身者は一人、他町村や遠くからの協力で成り立っている。
　御留川を歩く会に取り組んで初めて、自分自身の一番苦しい時だった。親戚の甥の為に老体を晒しながら時間を割いた。笑っていた人もあったというが、其れはそれで私にとって大切な時間だった。左手首を怪我した事は大きな痛手だったから、体のバランスが大きく崩れ指先、腕に響いて、動きが鈍くなった。唯一の機動力である自転車も使用できない二ヶ月が続いた。天候が悪いのも余計に不利な条件となった。一応、女として家庭のこと、地域とのことも言うまでもなく熟していかねばならない。他の会との係わりも然りだ。誰も二十四時間しか持ってないのだから、分相応にやるべきだと分っていても、乗り出した船も止める事も出来ず、ここに言い訳を並べている。
友人、妹、会員の暖かい協力が、私を動かす原動力となってくれた。
　さあ当日を迎えた。大井戸運動公園に集合、しみじみの村の会の人達四人は、既に準備して待っていて下さった。私らは負んぶに抱っこの甘えた主催者、そこに小型トラック十二～三台の一群が入って来た。凄い数の参加者かと一瞬思ったが、顔見知りの人達で、前に一寸耳にした蓮組合の若手達だった.
声をかけると、今日はボランティアで塵拾いとのことだった。挨拶、互いの紹介をし合って別れ、私達は作業の段取りを話す。十三人（しみじみの村の四人と参加者九人）の中二人がトラックで塵集め、八キロを一キロずつに分け、二人一組で自分の区域を往復、一人二袋ずつ拾う予定で出発、上・下高崎一～三キロは菜の花の種播きの人達に前以ってお願いしておいたのでお任せとし、代表に挨拶に寄った。塵が既に二台の小型トラックに積み込まれていた。山王川の南側に大分前から置き去りにされていた洗濯機、大型タイヤも積み上げる所だった。
「いやー。大仕事だった」と明るく言ってくれた。
「本当にご苦労さまね」と返して、仲間のところに戻る。みんなで行う事が意義があり、価値がある事を確認した思いだった。次に何かで会った時、言葉の掛け合い、人としての繋がりも暖かさを増す事だろう。
戻って、集まった塵の状況を話し合った。
・堤防近くに人家がない所程、塵は多かった。
・風の向き、水の流れで集まる場所も確認。
・釣の人の置いていく量は、前より減った。
・車から投げられる物が圧倒的に多いが、自転車
　や歩きのポイ捨ても馬鹿に出来ない。
中身は缶、ペットボトル、発泡スチロール類、紙屑、ビニール袋、木っ端、細かく言うと缶に一杯詰め込んだ煙草の吸殻、飲み残しがたくさんあるペットボトル、食べた後の一セット（ペットボトル、箸、弁当、おかず）は結構多かった。車の椅子、座布団、挙げれば切りが無い。
・天王宮近くの堤防には、持ち主が放棄した小舟が七艘並べられてあった。
水の中にも何れ程の物が沈んでいるか、分らないだろう。人間の意志で行われている事だと思うと、とても悲しい限りだ。
　仕上げとして生涯学習センターへ塵を運び種類分けした。燃やせる物、燃やせない物、特に汚れた物は洗い流し、丁寧に片付ける事をしみじみの会の人達から学んだ。こういう機会を多くの人が体験していくようにあらゆる団体、家庭、地域で取り組まねばと、それも早急にと感じながらKさん宅の竹細工工房に寄る為急いだ。
　日常用品、趣味的作品、大型の物、実に興味をそそる物が並べられている。細工の丁寧さ、時間をかけての作業の話しも、この目粉しい社会生活の中で貴重な仕事であり、大切にしたいお一人だと思った。地味な仕事をより多くの人に紹介する活動もきちんと考え、進められている事にもエールを送りながら工房を後にした。
　地元で頑張って魚屋と食堂を経営している若い人の店で昼食をする為急いだ。少し遅れ気味だったが参加者全員の顔が揃った。食事を待つ時間も食後も話しが弾んだ。今迄にこんなに親しみのある会話が盛り上がったのは初めてのように思う。会う機会の積み重ね、終わりに近くなった雰囲気

も加わってか、参加者全員という喜びも加わったからだろうか、楽しい一時だった。只、足は大丈夫だったろうか、お座りで痛みはなかったろうか。と後で思った。

この活動のその後、とても豊かな実りを得た。当日参加者のAさんが、十二月第二週の活動に参加してくれたと、しみじみの会の人から聞いた。今迄にも、「しみじみ村の活動、月二回の塵拾い」のことは、広範囲に紹介したが、問い合わせは数人いたが、参加には至らなかった。私でさえ、（私なりの塵拾い、塵を捨てた人達に対する反抗）でやってきたが、私は素直じゃない心からの活動だったことを恥ずかしかったと、改めて反省した機会だった。十二月第四日曜日朝、いづみの散歩と兼ねて原田水産沿い堤防から恵比寿神社辺りの堤防迄拾ってコスモスに行ったが、すれ違いでしみじみの会の人やAさんは帰るところだった。令和二年一月第二週は張り切ってのスタートだった。片付けにも間に合いAさんにも会えた。

私はAさんの素直さに感化された喜びをみんなの前で話した。ところで一月第四日曜日はすっかり忘れてしまった。板につかない私だが次に向けて確りやろう。

泉神社

小林幸枝

茨城県日立市にある「泉神社」を紹介したいと思います。

あまり有名ではないけれど、パワースポットとして有名な神社だそうです。

森に囲まれた泉と小さなお社があり、この泉周辺を神域として「泉ヶ森」と呼ばれています。

常陸国風土記には「密筑(みつき)の大井」として記録されていて、茨城県指定文化財史跡に指定されています。このように大昔からずっと変わらずこの地にあるって凄いだと思います。

「常陸国」とは、茨城県ほぼ全域を指した令制国の名称で、現在でもこの「常陸」という漢字表記はあらゆるところで目にします。

他の地域の方々にとってはは、「ひたち」とは読めないかもしれませんね。

泉ヶ森の中で特別目を引くのが、近づいてみるとエメラルドグリーンの色をした泉の中心からポコポコと水が湧き出ていてとても綺麗でした。また池が鏡のように見えとても美しいです。

ちなみに、奈良時代初期の713年(和銅6年)に編集された、日本最古の郷土誌「常陸国風土記」にこの泉のことが以下のように書かれています。

此より東北のかた二里に密筑あり。

村の中に淨泉あり。俗、大井と謂う。

夏は冷ややかにして冬は暖かなり、湧き溢れて河となれり。

緑と水に恵まれた歴史のある神社ですので、気になった方は是非参拝してみてくださいね。

泉神社
日立市水木町2-22-1

父のこと（18）

菊地孝夫

〔ネズミ話〕

今年はねずみ年、というわけでネズミの思い出ばなしを一席。

「おいおい、もう二月だろう。」

という声が聞こえてきそうだが、生憎と我が家は、ちかごろ旧暦（太陰暦）を採用しているので、この原稿を書いているのは、新暦（太陽暦）でもまだ1月半ばで、太陰暦で言うと、一二月一九日。（今日は成人の日の休日である。）だから、年が明けるのは、２５日、まだまだ先の話になる。

ある日、隣の部屋から

「ギャーっ、助けてー！」

という声が聞こえた。何事かと覗くと、部屋の中ほどを指さして、ガタガタと震えている。見ると、そこには小さい猫ほどもある大ネズミが、口から血を吐いて息絶えている。ドブネズミだろう。何処にもネズミはいると思うのだが、こんな大きなのは見たことなかったのだろうか。如何にも無念の形相で、こっちを睨んでいる。

散らかしっぱなしの私の仕事部屋を、「やめろ」というのに片付けた結果がこれだ。

そういえば、数日前から、それまでは、ドタバタとしきりに天井裏をうるさく駆け回っていたネズミの足音がしなくなっていた。きっと近所の人が撒いた、殺鼠剤でも食らって、あの世行きになったのだろう。

庭の片隅に、小さな十字架でも立てて埋めてやろ

うとしら、どうしても嫌だという。仕方ないから、ごみの袋に入れて捨ててしまった。
同棲生活が始まって、間もなくの出来事だった。今にして思えば、この一件も、二人の仲がうまくいかなくなった原因の一つなのかもしれない。
本人はそのくせ、ネズミのキャラクターで有名な遊園地には喜んで行ったりするのだから、全く理解できない。あそこの着ぐるみなぞは人間と同じ大きさで、それこそ猫なんかあっさりと踏みつぶされてしまうだろう。

それ以前にも、家ネズミの一家が棲みついてしまって、退治しても退治しても現れ、米や餅をかじり、靴下などを持って行ってしまう。おそらく巣穴に持って行くのだろう。何しろ古い木造家屋なので、どっからでも入ってこられる。
めぼしい所は塞いだつもりだが、家ネズミは小型だから、ちょっとした隙間さえあれば、いくらでも侵入できる。賢いので、いくら殺鼠剤を仕掛けても食べない。(たまに、間抜けな奴が、ゴキブリホイホイに、とっ捕まって、ジタバタしたりした事があったりはしたけれど。)
夜になると、しきりに天井裏から、カリカリ、カリカリ、と柱をかじる音がする。うるさいので、棒でもって天井を突くのだが、その時はほんの少しだけ収まるだけで、またカリカリが始まる。
そのうち慣れてきて、目の前をササッと横切ったりする。手元のものを投げつけるのだが、当りはしない。超音波の音で撃退する、という商品を買ってきて、仕掛けてみたりはしたが一向に効果なし。こいつらは実にタフである。
食品会社の倉庫では、専門業者とネズミの攻防が繰り広げられるが、これも終わりがない。

古典落語に、ネズミが、金の小粒の入った餅を、お世話になった人に届け、貧乏だった善人が、一夜にしてお大尽になるお話があるけれど、こっちは一向にそんなそぶりもない。大事な食料を、
「しっけい」
とも言わず持って行ってしまう。
人間対ネズミの攻防は、数年続いた。いくらやっつけても向こうはネズミ算式に増えるからきりがない。かえってちょうどいい、ネズミの人口調整になっていた。増え過ぎればたちまち、彼らは食糧不足ともなろう。あいにく貸家なので、猫も飼ってはいけないという。

人間対ネズミの、いつ果てるともしれない攻防は、最後に人間の勝利に終わった。ある日を境にばったりと出現しなくなった。別に全滅したわけではない。非常手段を取ったのだけれど、その方法はあまりに残酷なので、ここには書かない。

或る年の正月の朝、玄関を出ると、足元に「跳びネズミ」の死がいが転がっていた。
「跳びネズミ」はアフリカかどっかが原産だから、どこかでペットとして飼われていたものが、逃げだしたかして、可哀そうに寒さでやられてしまったのだろう。
もともと熱帯の砂漠地帯の生き物だから、日本の冬の寒さでは到底生きられないだろうと思う。
もっとも、このまま温暖化が進んでゆけば、そのうち気候になじんで、そこらで繁殖し始めるかもしれない。

食料は、砂漠地帯より圧倒的に豊富だから、一度増え始まったら容易に駆除できなくなってしまうだろう。ペットショップは、商売あがったりになってしまうかも知れない。

昨年の夏ごろから、靴下が片方どっかへ行ってしまったり、暮れには餅が齧られたりしたので、
「ははあ、転居先のここにも現れやがったか」
と思ったが、隙間のないマンションのことなので、どこから入って来たかわからない。そこらをうろちょろして、そのうち姿を消してしまう。被害は靴下と餅ぐらいだけれど、不埒にも、すぐそばまで来て、皿の中の食べ残しを失敬していってしまったりもする。
よく見ると、なかなか可愛い顔をしているし、一匹だけらしいので、
「退治してしまうのもなぁ。どうしたものか。」
と思っている。

白井前代表には、きちんと調べてから書くように、と幾度も言われていたので、あらためて調べてみよう。跳びネズミは手元の広辞苑によると、こう出ている。

＊とび‐ねずみ【跳鼠】ネズミ目トビネズミ科の哺乳類の総称。略。頭胴長５～１５㎝、尾長８～２５㎝。体に比べ後足と尾が極めて大きく、跳躍力が強い。(中略)
アフリカと中央アジア、モンゴルの草原に分布、乾燥に適している、とある。

正月番組で、イースター島のモアイ像の事をやっ

ていたが、この島に移住した先祖が、食用として南洋ネズミを持ち込んだ。もともと火山島で、天敵がいないのをいいことに瞬くうちに繁殖したらしい。

やがて、島民の主食のタロイモなどを食べつくし、雑食なので、植物の芽や、別の食用の鶏の卵などを食べあさる。

今、中国武漢市を発生源とする、新型のコロナウイルスによる肺炎の流行が拡大している。その原因と思われる一つが竹ネズミという食用のネズミ。なんでも食べてしまう中国人は、かつて、ネズミの赤ん坊をはちみつ漬けにした珍味があったと聞く。食用のアライグマという説もあり、野生動物が本来保菌動物になっていることは間違いなく、日本でも、イノシシやシカなどを食べることがジビエ食のブームとして広がっているが、少し考え直すべきかと思う。

きちんと殺菌の処理がなされていれば問題はないが、どこにも抜け道を潜るものがいる。少しばかりの金欲しさで、国外の小動物を密輸する。これだけ人口の移動が激しければ、検疫の網を潜ってしまうことが考えられる。

〔おみくじ〕

1月2日、久々に初詣とやらにでかけた。そこで引いた、おみくじは、みごと大吉だった。占のことに触れたので、「令和二年版　神宮館九星暦」なる本を買ってみた。定価八〇〇円、消費税八〇円なり。創建一一〇年と言うから明治四一年からという事になる。もっと古いものかと思っていたが、私が初めて目にしたのは五〇年以上前になるから、その時はまだ七〇年ほどの比較的新しいものだったので、意外だなとおもった。

ページをぱらぱらとめくると、始めに高島呑象先生の肖像写真が載っている。正五位勲四等とある。正五位と言えば、いにしえの殿上人である。羽織姿の写真には家紋が写っていて、偶然にも我が家と同じ三ツ柏だ。たぶん神職なのだろう。

さらにページをめくると、男女の相性と言う項目がある。開いてみると、父（申）と母（子）は相性が良いと出ている。子供心にも、確かに父母は仲が良かった。時に母を平手打ちしたりしたこともあったが、我儘な父に対してよく仕えていたと思う。

父のいないところでは、

「仲人に騙された、騙された」

とか、しきりに騙されたと言っていたのを覚えている。

干支で言うと、祖母は（未）兄は（亥）私は（寅）妹は（辰）になる。

私との相性がいいのは・・・、まあここらでやめておくことにしましょうか。

つい先日聞いたところでは、向かいのKさんちのHさんが、結婚前の若いころ家に来て洋裁を習っていたということだった。私には全く記憶がない。たぶん小学生の頃で、おそらくその時間帯には、表で遊び呆けていたので、遇わなかったのだろうと思う。

Kさんの家は、5人兄弟で、（私には4人しか記憶にない）一番下の「たーちゃん」は、5，6歳年上のいわば親分格で、当時の私にとっては憬れの人であった。スポーツ万能という感じで、竹馬に乗って自在に闊歩し、ベーゴマの腕もすごかった。あるとき、Kさんのところから大きなチーズの塊が届けられた。これは、その後勤めだした「たーちゃん」が、勤務先の乳業会社から持ってきたものだとのこと。その時一緒にたくさんのプチ・シュークリームも戴いた。なんでも、ちょっと出来が悪いもので、売り物にはならないのだという事だったが、味に変わりはない。あっという間に胃袋に収まった。食べ物のことは克明に覚えているものだ。

先日、K・Kさんにあったら、名前を出して貰っては困ると言われた。どんなに隠したところで、近所の人が見れば誰の事だかすぐにわかってしまう。

私としては、別に悪口を書いているわけではないので、いいかなと思っていたのだけれど、それに、総部数５００部ばかりの小冊子など、近所で読んでいる人はいないだろう、とたかをくくっていたものだからで。

大きく言ってしまえば、たとえ一地方の事でも、5，６０年前の事はもはや一つの歴史と言ってもよく、歴史ものの本などを読んでいると、英雄豪傑や有名人の暮らしぶりは判るけれど、当たり前に居た多くの普通の人たちの暮らしぶりがさっぱりわからない。

何をいくらで買って食べ、普段はどんなことをしゃべっていたのか、どんなことを考えていたのか、どんな遊びをしていたのか、と興味は尽きない。あと五，六〇年たてばこれらのことはすっかり判らなくなってしまうであろう。

石岡の一つの小字（こあざ）の一家族の出来事

を、できる限り正確に書こうと思って始めた事。それが大袈裟にいえば、現代史のホンの一コマともなるからである。書いていく過程でこれからもこういったことはたびたび起こるだろうけれど、極力事前に了解を取っているつもりではある。けれどもこれが行き過ぎれば、詰まらないただのフィクションと変わらなくなってしまうとおもう。

ともあれ、誌上を借りまして、失礼の段幾重にもお詫びします。

年の初めには、一年の計で、今年の目標を掲げるのだけれど、はてさてどうしようか。

ほんのすこうしばかり飲んだお屠蘇が、すきっ腹に効いてしまい、もうろうとする頭でこの原稿を書いている。新春から思わぬ大笑いをしてしまい、こいつは春から縁起がいいわい。

「昔話について」（三）　木村　進

百合の精

可憐な花の精が人（女性）に姿を代えたり、女性が実は花の精であったというような話を題材にした話も昔からいくつも伝わっています。そんな中で特に「百合」がテーマとなった話をまとめてみました。

《1　夏目漱石　夢十夜：第一夜》

こんな夢を見た。

腕組をして枕元に坐わっていると、仰向きに寝た女が、静かな声でもう死にますと云う。

女は長い髪を枕に敷いて、輪郭の柔らかな瓜実顔をその中に横たえている。

真白な頬の底に温かい血の色がほどよく差して、唇の色は無論赤い。とうてい死にそうには見えない。

しかし女は静かな声で、もう死にますと判然り云った。自分も確かにこれは死ぬなと思った。

そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上から覗き込むようにして聞いて見た。

死にますとも、と云いながら、女はぱっちりと眼を開けた。

大きな潤いのある眼で、長い睫に包まれた中は、ただ一面に真黒であった。

その真黒な眸の奥に、自分の姿が鮮かに浮かんでいる。

自分は透き徹るほど深く見えるこの黒眼の色沢を眺めて、これでも死ぬのかと思った。

それで、ねんごろに枕の傍へ口を付けて、死ぬんじゃなかろうね、大丈夫だろうね、とまた聞き返した。

すると女は黒い眼を眠そうにみはったまま、やっぱり静かな声で、でも、死ぬんですもの、仕方がないわと云った。

じゃ、私の顔が見えるかいと一心に聞くと、見えるかいって、そら、そこに、写ってるじゃありませんかと、にこりと笑って見せた。自分は黙って、顔を枕から離した。腕組をしながら、どうしても死ぬのかなと思った。

しばらくして、女がまたこう云った。

「死んだら、埋うめて下さい。大きな真珠貝で穴を掘って。そうして天から落ちて来る星の破片を墓標に置いて下さい。そうして墓の傍に待っていて下さい。また逢いに来ますから」

自分は、いつ逢いに来るかねと聞いた。

「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それからまた出るでしょう、そうしてまた沈むでしょう。――赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、――あなた、待っていられますか」

自分は黙って首肯いた。女は静かな調子を一段張り上げて、

「百年待っていて下さい」と思い切った声で云った。

「百年、私の墓の傍に坐って待っていて下さい。きっと逢いに来ますから」

自分はただ待っていると答えた。すると、黒い眸のなかに鮮かに見えた自分の姿が、ぼうっと崩れて来た。静かな水が動いて写る影を乱したように、流れ出したと思ったら、女の眼がぱちりと閉じた。長い睫の間から涙が頬へ垂れた。――もう死んでいた。

自分はそれから庭へ下りて、真珠貝で穴を掘った。真珠貝は大きな滑らかな縁の鋭い貝であった。土をすくうたびに、貝の裏に月の光が差してきらきらした。湿った土の匂いもした。穴はしばらくして掘れた。

女をその中に入れた。そうして柔らかい土を、上からそっと掛けた。掛けるたびに真珠貝の裏に月の光が差した。

それから星の破片の落ちたのを拾って来て、かろく土の上へ乗せた。星の破片は丸かった。
長い間大空を落ちている間に、角が取れて滑らかになったんだろうと思った。
抱き上げて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖くなった。

自分は苔の上に坐った。
これから百年の間こうして待っているんだなと考えながら、腕組をして、丸い墓石を眺めていた。
そのうちに、女の云った通り日が東から出た。大きな赤い日であった。それがまた女の云った通り、やがて西へ落ちた。
赤いまんまでのっと落ちて行った。一つと自分は勘定した。

しばらくするとまた唐紅の天道がのそりと上って来た。そうして黙って沈んでしまった。二つとまた勘定した。
自分はこう云う風に一つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分らない。
勘定しても、勘定しても、しつくせないほど赤い日が頭の上を通り越して行った。それでも百年がまだ来ない。
しまいには、苔の生はえた丸い石を眺めて、自分は女に欺されたのではなかろうかと思い出した。

すると石の下から斜すに自分の方へ向いて青い茎が伸びて来た。見る間に長くなってちょうど自分の胸のあたりまで来て留まった。
と思うと、すらりと揺ぐ茎の頂に、心持首を傾ぶけていた細長い一輪の蕾が、ふっくらと弁を開いた。
真白な百合が鼻の先で骨に徹えるほど匂った。
そこへ遥かの上から、ぽたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた。
自分は首を前へ出して冷たい露の滴たる、白い花弁に接吻した。
自分が百合から顔を離す拍子に思わず、遠い空を見たら、暁きの星がたった一つ瞬いていた。
「百年はもう来ていたんだな」とこの時始めて気がついた。

《2　白百合の精　唐「集異記」》

兗州の徂徠山に光化寺という寺がある。この寺の一室を借りて、読書に専心している青年がいた。
夏のある日、疲れた眼をやすませようと、廊下へでて壁画をながめていると、どこからともなく、白衣に身をつつんだ美人があらわれた。年のころは十五、六。書生は今までにこれほど美しい娘をみたことはなかった。
「どこからおいでになったのです」
ときくと、娘は笑いながら、「この山のふもとに家がございます」といった。
書生はほれぼれと娘を見つめ、部屋へ誘い込んで、ちぎりを結んだ。そのあとで娘はいった。
「田舎娘とお見捨てにならず、これからもお情けをかけてくださいませ。今日はこれで帰らなければなりませんけれど、近いうちにまたまいります」

書生は何とかして引きとめようとしたが、娘はどうしても今日は帰らなければならないといって、きかない。
そこで書生は、日ごろ大切にしている白玉の指輪を娘にわたして、「これをあげる。これを見たらわたしのことを思って、早くまたきておくれ」といい、娘を送って行った。すると娘は、
「家の者が迎えに出ているかもしれませんので、ここでもうお帰りになってください。」
といってことわった。
書生は娘と別れるとすぐ山門の上へのぼり、柱のかげに身をかくして見ていると、娘の姿は百歩ばかり行ったところで、かき消えるように見えなくなってしまった。

書生はその場所をおぼえておいて、すぐそこへ行ってみたが、小さい木や草が繁っている原っぱで、かくれるような場所などないのに、娘はどこへ行ってしまったのか、わからなかった。
やがて日が暮れてきたので帰ろうとして、ふと見ると、一本の百合が眼についた。綺麗な白い花をつけている。
書生がその根を掘りおこしてみると、根は両手ではさまなければ持てないほどもあって、普通の百合の根よりも何倍か大きかった。

寺へ帰ってから書生は、その大きな球根の皮を一枚ずつはがしてみた。
百枚近くもある皮をすっかりはがしたとき、娘にわたした白玉の指輪が出た。
書生はびっくりし、百合の根を掘りおこしたことを後悔したが、皮をみなはいでしまった今となっては、もうどうすることもできない。
書生は後悔のあまり病気になり、十日たつと死ん

でしまった。　　唐「集異記」

《3　川端康成　「百合」》

（掌の小説：122編のもっとも短い短編）　1927年5月に百合の花と題して発表

百合子は小学校の時、「梅子さんは何て可哀想なんだろう。親指より小さい鉛筆を使って、兄さんの古カバンを提げて。」と思った。

そして、一番好きなお友だちと同じものを持つために、小刀に附いた小さい鋸で長い鉛筆を幾つにも切り、兄のない彼女は男の子のカバンを泣いて買って貰った。

女学校の時、「松子さんは何て美しいんだろう。耳朶や手の指が霜焼でちょっぴり紅くなっている可愛さったら。」と思った。

そして、一番好きなお友だちと同じようになるために、洗面器の冷たい水に長いこと手を漬けていたり、耳を水に濡らしたまま朝風に吹かれて学校へ行ったりした。

女学校を出て結婚すると、言うまでもなく百合子は溺れるように夫を愛した。そして一番好きな人に倣い、彼の通りにするために、髪を切り、強度の近眼眼鏡を掛け、髭を生やし、マドロスパイプを銜え、夫を「おい。」と呼び、活発に歩いて陸軍に志願しようとした。

ところが驚いたことには、そのどれ一つとして夫は許してくれなかった。夫と同じ肌襦袢を着ることにさえ文句を言った。

夫と同じように紅白粉を附けないことにさえ厭な顔をした。

だから彼女の愛は手足を縛られた不自由さで、芽を切り取られたようにだんだん衰えて行った。

「何て厭な人なんだろう。どうして私を同じようにさせてくれないのだろう。愛する人と私が違っているなんて、あんまり寂しいもの。」

そして、百合子は神様を愛するようになった。彼女は祈った。「神様、どうぞお姿をお見せ下さいまし。どうかして見せて下さいまし。私は愛する神様と同じ姿になり、同じことをしたいのでございます。」

神様の御声が空から爽かに響き渡って来た。「汝百合の花となるべし。百合の花の如く何ものをも愛するなかれ。百合の花の如く総てのものを愛すべし。」

「はい。」と素直に答えて、百合子は一輪の百合の花になった。

《4　あかりの花・中国苗族民話》

むかし、都林(トーリン)という若者が、夏の暑い日に、山の畑で汗にまみれながら働いておりました。

体からは豆粒のような汗が次から次へと流れ落ち、それが石の窪みに落ちました。

するとその岩のくぼみから緑の茎が伸び、まっ白い百合の花がひとつ咲きました。

花は太陽に照らされてきらきら輝き、風にゆらゆら揺れながら、歌声を発しました。

それから毎日、都林は百合の花の歌声を聴きながら、一生懸命畑を耕しました。

山へいくのが楽しみになった都林は、ある日そのユリの花が獣によって踏み倒されているのをみて、急いで百合を抱き起こし、そのユリの花を丁寧にうちへ持ち帰り、石うすのなかに植え、窓辺に置きました。

するとユリはまた毎日美しい歌を聞かせてくれました。

都林は夜あかりの下で竹かごを編みながら、百合の花の歌声に微笑みを浮かべました。

十五夜の晩のことです。都林があかりの下で竹かごを編んでいると、突然、灯心が揺れて大きな赤い花が咲きました。

その花の中から白い服を着た美しい娘が現れて、歌をうたいます。そしていつの間にか窓辺の百合の花は消えていました。

その日から二人は、昼は山の畑で仲良く働きました。そして夜は、都林は竹かごをあみ、娘は美しい刺繍をした布をつくりました。

市の立つ日には畑の作物とその布を一緒に売り、帰りはくわや糸を買って帰る生活をおくって、二人は幸せに過ごしました。

そうして2年後、都林は立派な家を建て、倉に

は食べ物を、納屋には牛や羊をたくさん持つようになりました。

すると都林は働かなくなり、毎日遊び歩くようになりました。市で物を売っても、帰りに酒や肉を買って飲み食いしてしまい、畑や夜なべ仕事も、あれこれ言い訳をしてしませんでした。娘に忠告されても、一向に働こうとしませんでした。

そして、とうとうある十五夜の満月の夜に、娘があかりの下で、刺繍をしていると、突然、灯心が揺れて大きな赤い花が咲きました。赤い花の中から美しい孔雀（金鶏鳥）が現れて歌をうたいました。・・・私と一緒に天へ行こう・・・・・と歌います。

そして、孔雀は（金鶏鳥）は花から飛び降りると、娘を背に乗せ、窓から飛び立ちました。都林は慌てて孔雀は（金鶏鳥）を捕まえようとしましたが、黄金の羽を一枚だけ引き抜いただけでした。

そして孔雀（金鶏鳥）に乗って娘は満月の中へ消えて行きました。

（藤城清治作　「あかりの花」　より）

残された都林はさらに怠け者になり、着るものも食べるものもなくなり、床に敷いたたった一枚のむしろも売ろうとしました。

するとそこから、刺繍をした綺麗な布が二枚出てきました。

その刺繍に描かれていたのは、一枚は都林と娘がたのしげに畑で採りいれものであり、もう一枚は二人がむつまじく夜なべをしているものでした。

これをみた都林は、昔、貧しくても充実したころのことを思い出しました。

そして、また昼も夜も一生懸命働くようになりました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

これは中国の苗族という部族に伝わる話です。一般にはミャオ族というようですが、日本人の習慣と似たところがあり、日本人のルーツとも言われる民族だそうです。

昔、紀元前770～紀元前400年の春秋戦国時代には楚（～BC223）の文化を築きますが、秦の始皇帝の統一により部族は奥地に追いやられ、中国西南部の山の中、現 貴州省に住みつくようになったといいます。

人口約750万人。また中国以外にもベトナムやラオス、タイなどにも広く住んでいます。

そして民族衣装は有名で、素晴らしい刺繍が施されています。

（あかりの花・中国苗族民話・/肖甘牛　採話　君島久子　再話　赤羽末吉　画/福音館書店/1985年初版）

《5　その他の話》

百合の精に関してはその他、ヨーロッパなどでキリスト教とのかかわりでも多くの話があります。

1）ドイツの民話　：ラウエンブルグの夜のユリ

昔のこと、ハルツという山あいにアルスという美しい娘が母親と住んでいた、ある時ラウエンブルグ公が乗馬をしていたいて偶然にもアルスと出会うのだが、公は一目惚れらしい、無理矢理アルスを自分の城へ連れて行こうとするのだが、ちょっとのすきにアルスの姿が見えないのだ、そしてその場所には「シラユリ」が生えて来たという。

2）　旧約聖書より

アダムの妻イヴが禁断の実を食べてエデンの楽園を追われたとき、自ら懐妊に事実を知る。そんなイヴの流した涙が地上に落ちて白いユリの花になったという。

3）　古事記より

日本最古の神話である古事記の中で、百合は「狭伊(さい)」の名で登場します。
古事記中巻に、初代神武天皇が、大和の豪族・大物主神の娘・伊須気余理(いすけより)姫を皇后に娶る話が載っています。
それによると、姫は山百合が繁る狭伊川の辺りに住んでいて、その川の名が、当時の山百合であったといいます。
百合の名前が使われ始めたのは飛鳥時代で、「狭伊」の名は「百合(ゆり)」に変わりました。
この名前（中国から伝わった漢名）の由来は、地下の球根が多数の鱗片の塊で出来ていることに由来するといいます。

まあいろいろお話しはありそうですが、「白百合」はどうも女性そのものをさしているようにも思えます。

【風の談話室】

《読者投稿》
やさと暮らし（36）　　さと女

回覧板を届けた先のお宅にロウバイの花が咲いている。蝋細工の様な花びらが微かな香りを漂わせ、毎年春が来るまえに咲いている。暖冬気味の今冬、年末から年始にかけて・・・。

・エコクラフトの仲間から頂いた、沢山の金平糖と思ったら・・・まあ！小さくたんねんに折られた、星形の折り紙。コロちゃんの供養にと１つ１つ折ってくれたとの事・・・元気ださなくちゃ。今夕のおかずは餃子、夫が丁寧に包んでくれ、そして焼いて・・・。

・今年も余すところあと数日。エコクラフトの仲間も毎週よく頑張った。皆勤賞の仲間も数名。オリーブのママ、いつもありがとう。来年もみんな元気で集まれますように・・・。

・今年も残すところ１日です。大晦日前日マリアージュにて山本恵莉子年末ライブ。いつもながら透き通るきれいな声で20数曲熱唱してくれた。恵莉子ちゃんが歌ってくれた「命の歌」では、つらい別れが何度もあった今年なので思わず涙が・・・。ふるさとへの思いや、愛の歌、歌詞が心に残ります。同伴者（夫）がフラワーパークのイルミネーション宣伝をして居ます。恵莉子ちゃんは、そのフラワーパークイルミネーションをイメージした新曲を披露してくれた。

“ふるさと風の会”が今年最後の定例会。その後忘年会をするというので招待された。ふるさと風の会にとって、今年は悲しい出来事が・・・皆さん前向きに白井先生の意志を次いで頑張っています。食事の後はそろってお墓参り、心の中でちょっと愚痴ったりして「なんでいなくなっちゃったの、まだはやすぎるよ！なんて・・・」そのあと、また悲しい知らせが・・・。

・あけましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願いします。ことしの正月は、新年の日にふさわしく青空です。遠くからやってきた来客とお墓参りを済ませ夕食の支度、三浦半島の美味しい海鮮物のお土産、これから楽しい宴会が始まる。今日の夕食は猪鍋。食べて飲んで、夜が更けて・・・どうか平和な１年であることを願って・・・。

・来客と入れ違いに息子夫婦がやってきた、今夜は池之端のキノコうどんを食べに・・・。翌日その息子が日本一の獅子頭をみたいというので、さっそく常陸風土記の丘へ。そういえば１度も案内したことがなかった。どうもある映画のロケ地になっていたらしく、石岡に行ったら見てみようと思っていたらしい。近くに行くと迫力はすごい。中にも入れるので階段を上ってみた。中に入ると・・・もっと工夫がないのかな？・・・とのつぶやき声が・・・。

・お隣さんから丸餅を沢山いただく、今日はならせ餅を飾る日だからと・・・。ならせ餅は、正

月行事のひとつで、今年の五穀豊穣を願って、嘗ては何処の家でも作っていた。むかし、この時期になると父は楢の木の枝を、何処からか持ってくる。家族みんなで餅を丸め、持ってきた枝に実のように刺す。数日飾った後は、その餅を細かく砕いて、大きな笊や莚に並べカラカラになるまで干した。保存食にした餅を、油で揚げたおかきにしたり、砂糖と醤油でからめたり・・・。田植えなど農作業時の10時や3時のおやつとして食べた。今では農家でも作る家が少なくなったような気がする。

《風の呟き　》

常府大名　　打田昇三

寛永十九年（一六四二）徳川幕府第三代将軍・家光により設けられた「参勤交代の制度」により諸大名などは定期的に領国と江戸とを往復させられたけれども、徳川御三家のうち水戸藩と其の支藩である府中（石岡）藩などは、大藩の尾張と紀伊を差し置いて「常府大名」に指定されたので藩主は江戸詰めとなり参勤交代をせずに済んだ。

其の理由は政策的な事の他に、初代水戸藩主の徳川頼房（家康の第十一子）が、英勝院の養子になっていたからであろう。英勝院は家康の最後を看取った側室で「お勝の方」と言い関ヶ原合戦に騎馬で家康に従った女丈夫である。家督を秀忠に譲った家康は英勝院と共に浜松に隠棲し英勝院は其処で女児を生んだ。其の子は伊達政宗の子と縁組をする約束であったが夭折してしまった。嘆き悲しむお勝の方を見かねた家康は末子の頼房を養子として与えたのである。家康の死後に英勝院は水戸藩に身を寄せて生涯を過ごした。其の為に御三家でも水戸藩主の官は中納言に留まった。

少年時代の家光は何となくのんびりしており、弟の忠長が利発なので将軍秀忠夫妻は後継者として忠長に期待していた。秀忠夫人は淀君の妹で年上のため俗に言う「嬶天下」である。それを案じた乳母・春日の局が密かに浜松へ行き英勝院を介して家康に嘆願をしたので、家康は直ちに江戸城へ向かい親族・重臣一同を集めて「後継者は家光」であることを宣言したのである。

やがて将軍の職に就いた家光は春日局から聞かされていた「少年時代の事情、特に英勝院の恩」を忘れずにいたので「参勤交代」の際に水戸藩だけを「江戸詰め」にしたのであろう。

人生の独立　　木村進

福沢諭吉が福翁百話とは別に「福翁百餘話」として19編の話を書いている。

この中に、その最初の章に「人生の独立」ということが書かれている。

その内容を大雑把に要約すると

「人生の独立などと文字で書けば難しそうだが、深い意味はない。他人に厄介にならないことに過ぎない。

父母の手を離れて一人前の成人男女となったならば、他人はもちろん自分の両親に対してもこれを煩はすのは独立の本位に背くものだ。

この独立には心の独立と、身体の独立の二つのものがある。

「身体の独立」とは親や他人の物質的な援助を受けずに、自分の力で解決していくことであり、「心の独立」とは、社会の処世において自分の考えを持ち、それを言い行って満腔豁然(まんこうかつぜん)洗うが如くにして秋毫(しゅうごう)の微も節を屈することがない姿を言う。

しかし、この心の独立を成し遂げるには、まず身体の独立が先になされていなければならない。」

要は、親を含め他人に衣食住の世話になっていては、いくら自分の考え方を主張しても心の独立は得られないというのだ。

まあ、生まれながらに平等というが、今の世の中を見渡しても生まれながらに親の遺産や土地を持っていれば結構うまくやっていけるようだ。家のローンで四苦八苦して子供の教育にも教育ローンなどして苦労している身には、ちっとも平等ではない。

さあ今年の冬は暖かい。春になり花が一斉に咲きだせば嫌なことなど忘れて気分も前向きになる事だろう。

【特別企画】

打田昇三の将門記　「罪と名声」　（三）

「魚は頭から腐る」というローマ時代の格言が有るとか。日本の場合は魚の頭に相当する天皇制の紀元を「世界に誇る歴史」としていた話が実は上手な創作らしい。軍国主義の足音が聞こえ始めた昭和十五年（一九四〇）には建国二千六百年（紀元前六六〇年創設）になると言うので奉祝行事を主催する団体に皇室から百万円が下賜されているが紀元前六六〇年と言えば共和制古代ローマが出来たばかりであるし、中国は春秋戦国時代の前になり、エジプトの新王国が滅び、ペルシアにアケメネス王朝が起こり、地中海ではカルタゴやフェニキアなどの海洋国家が活躍していた頃で、日本列島では縄文時代にも入っておらず積み石古墳や貝塚でしか当時が推定出来ないらしいから、当然ながら未だ国家などは無く、天皇も天狗も居なかったと思うしかない。歴史の嘘も上手につかないと信用してくれる国民に愛想を尽かされる。それでも、その怪しい王制について他の国とは異なる特徴が有る…と説かれた学者が居られるから世の中は捨てたものでも無い。その特徴というのが、①争いは皇室の内部で起きる。②皇族以外は天皇にならない（なれない）③皇位争いに外国の干渉が無い…の三点であるとか。別に皇族で無くても後継者選定とは、そういうものであろう。

昭和二十年八月迄は国の歴史として子供にまで嘘が強要されていた当時の主役・天照大神や神武天皇などには引退して頂いて、先ず古墳時代あたりの部族長から発展した邪馬台国、九州王朝、出雲王朝などの有力商社が各地の小規模資本を買収か謀略で潰しつつ店舗を広げた。そして遂には朝鮮半島の戦乱に便乗して天智・天武兄弟が藤原氏と共同出資で近畿地方に開店した大和商会が戦時需要に応える大手の企業として登場し、既存の諸王朝を買収するか謀略で潰すかして古代日本の市場独占に成功した。醜い相続争いは有ったけれども此の企業が全国規模に拡大したから、大和商会改め天皇制として後代に残ったのだと思う。

然しながら自画自賛の神話で神様に近づけた天皇制も奈良から京都に本店を移し、地方支店は従業員任せにしていた関係で遠方抑止力が低下し、少しずつ景気が悪くなってくる。その変化は、やがて天皇家から出た源氏と平家の争いという皮肉な形で現れ、遂にはそれが武家政治を生んで明治維新まで本社の形骸化は延々と続くことになる。其の先駆と言うのも言い過ぎではあるが、自分の身辺に起きた理不尽に対して本気で怒り本格的に武力を行使して戦った最初の元気者が平将門なのである。其れに因んで明治の文豪・幸田露伴は「平将門は（武家政治を始めた）源頼朝の恩人」と言ったらしい。それ程の評価を得ながら、なぜか平将門の知名度・評判が今一つなのが茨城県民として少し残念であるから、余計なお世話かも知れないが下手な釈明をさせて頂くのである。

○貞盛の窮状

「喧嘩両成敗」と言う言葉が有る。冷静に考えれば「善と悪」が有る筈なのだが事実が寸分違わず証明されないと紛争の公平な裁定は望めない。身内の争いから双方睨み合いの最中に密かに都を目指した平貞盛を、平将門が必死で追跡したのも敵側の一方的な主張を阻止する為である。追いつ追われつ、平家同士の両軍は信濃国・国分寺付近の千曲川を挟んで戦闘を繰り返したけれども肝心なところで将門は貞盛に逃げられてしまった。

追われる立場の貞盛一行は、筑波山麓を出たときには長旅の準備として糧食なども持参していたであろうが途中の合戦で無くなった。将門の軍勢に奪われた分も有ったかと思う。敵の目を逃れての旅なので物資不足、苦労や不自由は当然で原文には「旅の空の涙を草の目に注ぐ…」とある。負け戦さで苦労をするのは人間だけでは無い。馬も気の毒に疲れと寒さで苦しんでいる。貞盛に従う兵士は吹き渡る寒風を口にして、馬は薄雪を舐めて共に飢えと渇きを凌ぎ、辛うじて国境の難所を越えることが出来たのである…貞盛は自業自得と言えるが従う兵士と馬は災難である。それでも将門の追撃を振り切り辛うじて都に到達することが出来た。つまり常陸国から遥々と信濃国まで追跡してきた将門は、大事な場面で敵を野に放したことになる。此の失敗が将門の運命を変える。当然のことながら都に着いた貞盛は自分の立場から一方的に事件を脚色して太政官に訴え出た。訴状には貞盛の主張しか書かれていないが、確認しようにも方法が無い役所では「平将門を厳しく尋問するように…」天皇が命じた公文書を作成して下総国府に下す…と言う小学生並みの方法以外に思いつかない。不条理であるが、そうなると事件の発端・経過や理非の判断は関係無く「平将門は反逆者」という視点で物語が進行してしまう。天慶元年六月中旬に京都を発った平貞盛は来た時とは別人のように元気溌剌と帰って来た。其の手

には朝廷から下された「お墨付き」が有るから強気である。早速、将門の罪を宣伝したのだが全く反応が無かった。将門にしてみれば一方的な判断から下された命令書などは眼中に無い。
そうした中で事件の張本人とも言うべき平良兼が病死した。元を糺せば騒動の発端は良兼に有るので残された貞盛は落胆していた。其の年の十月には、同じ桓武平氏でも高棟流の平維扶（たいらこれすけ）が陸奥守として赴任する途中で下野国府に寄った。此の人物と親しかった貞盛は、将門との関係が何となく不安だったので、陸奥国へ連れて行って貰おうと考えて手紙で頼むと、深い事情を知らない維扶は承知をしてくれた。早速にみちのく逃避行の準備を始めたのだが、此の情報が将門方に漏れてしまったのである。
京都行きを阻止出来なかった将門は貞盛が陸奥守と同行することを警戒して直ちに軍勢を催し近辺の山野を捜索し始めた。上手く隠れた貞盛は見付からなかったのだが、是を知った平維扶が恐れて約束を破り大急ぎで陸奥国へ行ってしまった。
余計な事をしなければ地元に潜んで居られた平貞盛は再び追われる身になった。原本に従えば、
「朝には山を家とし、夕には石を以て枕と為す」とあるからホテル並みという訳にはいかない。
領地を離れれば賊に襲われる危険も出てくるし隠れるに適した場所も探し難い。その為に地元と言うか筑波山周辺、広くても常陸国内から離れることが出来ず、天を仰いで嘆き、地に伏して悲しみながら、鳥の声や風の音に、敵か！と驚く不安の中での逃亡生活を続けているばかりであった。
それでも隠れることに慣れてきた貞盛は、将門に探索されること無く過ごせたから、東国には合戦の音が止んでいる日々が続いたのである。

○武蔵国庁の紛争

世の中が平穏に越したことは無いが、下総・常陸両国内に土着した平家一族の揉め事に過ぎ無かった事件は、やがて隣国とも言うべき武蔵国庁で起きた同様の事件に合流するような形で広がって行くことになる。いずれも地方官僚・豪族が深く関わる事件であるが、その様な紛争を招くこと自体が、京都に居て地方からの搾取だけに専念していた当時の朝廷・政府・貴族・官僚たちの無能・無策に原因があったことは言うまでも無い。
承平八年（九三八）二月、武蔵の国で揉め事が起こった。此の年は五月から天慶元年に改元している。武蔵権守（武蔵国副知事）に任命された興世王（おきよのおおきみ）と武蔵介（局長格）を命じられた源経基（みなもとのつねもと）とが、足立郡郡司で国府の大掾職を兼ねる武蔵武芝（むさしたけしば）と対立したのである。
其れは興世王と源経基とが正式な任命状の到来しないうちに国府に入ろうとして武芝に拒否されたことが発端になる争いらしい。興世王は皇族として平家と同じく桓武天皇系を称し、源経基は陽成天皇系なのだが此の天皇の評判が悪いので一代上げて清和天皇系を称したと思うが、どちらにしても当時は皇族と盗賊が日本中に溢れていて次々と問題を起こしたらしい。困ったものである。
武蔵国府の監察官である武蔵武芝も祖先が神話時代に遡る名族であった。職務に忠実で、かつ情の有る公務員であったから誠に評判が良く地元の民に慕われていたのである。歴代の国司は決められた時期に赴任して細部のことは中間管理職に任せるのが慣例であったから、領民個々の税金徴収などに口を出すことは無かったのである。
ところが今回は、新任の興世王と源経基とが国司・武蔵守が着任する前にやってきて納税滞納者などを調べ始めた。未納者から徴収して自分の口座に入れるつもりなのである。其の企みを察知した武蔵武芝は、慣例に従って国司到着以前に興世王と源経基とが領内に立ち入ることを拒絶した。当然ながら儲け口を妨害された興世王と源経基は激怒した。二人は共謀して職権を乱用し国府に駐留する兵を動員したのである。国府駐留軍も王を名乗る上司に「オーノー」などとは言えないから無謀な命令でも従う他は無い。武蔵武芝は涙を飲んで暫くの間、身を隠すことにした。ところが是を知った興世王と源経基は、武芝の屋敷や周辺の民家を襲って目ぼしい物を奪い、国税庁の査察を真似て手当たり次第に封印をして回った。
そうなると、興世王と源経基という共に皇族から出て遠くない身分の者が其の官職を利用して盗賊並みの悪業を働くことになり、盗賊と皇族とは同じ分類になる。是は史実であるから、かつて大日本帝国などと書いたのは誤りで此の国は「怠日本低国」と呼ばれるべき国であった。将門記本文にも怒りを込めて次のように記録している。
およそ此の守（興世王）と介（源経基）主従の行状を見ると主人が暴君の仲和であり、家来は夜盗の様な欲心を持った人物である。二人は箸の様に協力して人々から税と称し財物を奪い取った。
「花陽国志」と言う中国の古書によると仲和は国の長官として税を重くし国内の民から私財を毟りとった人物であり其の家来も蟻のように民にたか

ったらしい。興世王と源経基は、其れを真似て、部下に領民の財産を盗ませ、其れを盗賊の所為にした。この為に武蔵国の民は疲弊した。

そこで武蔵国府に仕える下級役人の中で心ある人物たちが、かつて越後国で起きた同様の事件の処理方法を真似て問題の解決を図った。それは上司の失政を糾弾し反省を求める文書を武蔵国府庁舎の前に落とす…という方法である。その結果、事件（国府上司の悪事）は武蔵国中に知れ渡ったのであるが、容疑者となる人物が皇族となると同じ分類の者が関わる事件であるから、その糾弾も公平・公正には出来なくなるらしい。

○将門、調停に乗り出す

現代的な感覚で「郡」は「県」の下部組織に思えるが、平将門の時代には「郡」も諸国国司を経て中央に繋がっていたから、役所には郡長に相当する「大領」以下の役人（郡司）が居たのである。郡司になるには先ず候補者が選ばれ、是が郡司候補者として選抜されてから、国司の前で選抜試験を受ける。この候補者は「擬郡司」と呼ばれたらしいが偽物では無くエリートの部類に入る。

武蔵国足立郡の郡司・武蔵武芝も其の様にして選ばれた人物なので、不正な蓄財などは行なっていない…にもかかわらず、興世王と源経基は武芝の財物を没収した。そこで武芝は私財の返還を求める訴えを何度も起こしていたのである。しかし興世王らは最初から「部下の物は自分の物」という格言を勝手に拵えていたから返す意思は無い。

それどころか返還要求を反逆ととらえて、是を抑圧するために軍事行動を起こそうとした。さらに評判の良くない興世王グループ内でも狼の餌争いの様に源経基が不満を持っているらしい…その情報が、どういうルートか不明ながら瞬時にして下総国に伝わり平将門の耳に入ったのである。

その頃、仇敵として追い求める平貞盛が見つからず、振り上げた拳（こぶし）が宙に浮いた状態でいた平将門は、武蔵国の揉め事を聞いて妙な好奇心と言うか筋違いの義侠心を起こし、周りの者を集めて次の様に言った。

「武蔵国府で揉め事が起きているらしい。一方の武蔵武芝は親類でも一族でも無いし、相手方の権守や武蔵介も平家とは別系統の者である。知らぬ振りをしていても良いのだが、紛争が起きて困るのは民であるから、此処は双方の言い分を聴き、調停をしようと思う…」家来の中には「余計な事をしなくても…」と思った者も居たであろうが、反対は出来ない。天慶二年（九三九）二月頃に将門は手勢を率いて武蔵国へ向かい、取り敢えずは近くに武芝が潜伏していると思われる国府（大宮）へ出かけて行った。思いがけず「平将門」という時の人の訪問を受けた武蔵武芝は驚き、かつ喜んで是を迎えた。将門が先ず紛争の相手である興世王らの消息を尋ねると武芝は次のように答えた。

「権守（興世王）と介（源経基）とは武蔵国の軍勢を率い、家族まで連れて比企郡の狭服山に登りました…」狭服山が現在の何処になるのか判然とはしない様であるが入間郡の狭山丘陵とする説が多いらしい。そこで将門と武芝とは共に武蔵国府に向かったところ、興世王も先に国府へ行ったので此の三勢力が合流する形になったのである。

源経基は未だ到着して居なかった。将門は親切心から興世王と武芝を仲介させようとし酒宴を開き三者がアルコールの効き目で仲好しになったのであるから結構な話であるが、源経基だけが取り残されたような形になる。それに加えて源氏の祖とされる此の人物が公家としても官僚としても軍人としてもダメな男であった為に、問題が拗（こじ）れて複雑になってしまう。酒宴に参加出来なかった恨みで、自分だけが仲間外れにされた…と思い込み、将門が反逆者とされる原因が源経基によって作られてしまうのである。

○経基の狼狽

そのうちに平将門の登場で気を強くした武蔵武芝の軍勢が源経基の陣営を見つけ周囲を取り囲んだのである。原本には「故無くして（理由が無く）」と書いてあるが、前後の事情を考えれば経基軍が囲まれても仕方がないようにも思える。

表題が「経基の狼狽」であるから能無し武将の源経基は、此処で慌てて騒ぐ以外に出番が無い。威張るだけで武士（軍人）の本分を知らず、軍勢の扱いも不慣れな人物であるから源経基に従う兵も其れに相応しく驚き騒いで四方に逃げ散った。其の情報は武蔵国府に伝わったが、将門にしてみれば関係者を仲介して騒動を鎮めようと武蔵国に出て来た意味が無くなってしまった。当然ながら興世王は武蔵国衙に留まり将門は下総国に戻って来た。是で一件落着となる…筈ではあるが。

そうなると、逃げて居ただけの清和天皇の孫になる源経基の評判が悪くなり天皇の名前に傷が付く…と誰かが考えて嗾（けしかけ）たのか、或いは源経基が単なる馬鹿だったのか…「武蔵権守・興世王と平将門とが足立郡司・武蔵武芝に唆（そ

そのか）されて源経基の暗殺を企てている…」と勝手に思い込んでしまった。それも思い込むだけなら未だしも、自分の盲想を其の侭、事実として都に駆け戻って報告した。然も想像だけの恨みに尾鰭をつけて報告したから其の内容は重大事件として政府最高機関の太政官に奏上され、都中はまたしても平将門の話題で盛り上がった。

将門は最初に争いを仕掛けられた源護との対決で既に都に滞在し、其の際には「無罪」の判決を受けて其の名が知られている。源経基は自分の嘘がバレないように将門と興世王をセットにして報告した。都合良く興世王の評判が悪かったから、将門も「悪人仲間」にされてしまったのである。そうなると都のヒーローとして週刊誌にも取り上げられた「平将門」が鬼より怖い謀反人としてマスコミに再登場することになる。都中が大騒動。

かつて将門は、伯父の平国香に言われて都に登り太政大臣の藤原忠平に私的な奉公をしていた。遠い関東で起こった事件で詳細が分からない政府は源経基の訴えを受けて困ったけれども、放ってはおけないので藤原忠平に調査を命じた。原本には天慶二年三月二十五日に中宮少進（皇后に関する職を行う役所の下級職）多治真人助真が、偉い方から書状を託され、其れが同月二十八日には将門の許に届いたことになっている。前の場合と違い現代の郵便と同じ様で早すぎるが、これは公務員の仕事では無く、個人の仕事として行われたから迅速に処理されたのであろう。此処は日付を無視して話を進めることにする。

いずれにしても都からは平将門に対して、源経基の訴えが事実かどうか確認する書状が届いたと思われる。そこで将門は常陸、下総、下野、武蔵、上野の五か国から、謀反などの事実が無いことを証明する国府発行の公文書を貰い、五月二日には速達便で発送したのである。

一方、将門を追い廻していた伯父の平良兼は、其の疲れが原因では無いと思うが、六月上旬頃から体調を崩し寝たきりの状態になってしまった。勿論、将門と戦う元気は無い。気落ちして病床に居ながら髪を切り仏門に入る気になったので仏様も本人の希望を叶え間もなく迎えに来てくれた。

言い方は悪いが平将門にとっては厄病神が離れたようなものであるから常陸・下総両国で平穏無事な日々を過ごせるようになった。原本には「…それより後、更に殊なる事なし」とある。地元では問題が無くなったのであるから平将門は故郷で父祖の地を護り領民を保護して穏やかに暮らして居れば良い。その頃、関東諸国の国府からは武蔵国の紛争を治めてくれた平将門の行動を称える公文書が都に送られていたから、謀反人どころか一転して関東の著名人になってしまった。何かと騒がしかった常陸・下総両国も暫くは何事も無く過ぎていったのである。

元は中国の話らしいが「人間万事塞翁が馬」という諺がある。「人生の禍福吉凶による変転は測り知れない…」と言うことらしい。平将門の場合も身に振りかかった火の粉を何とか払い除けることが出来て一息ついたのであるが、その頃に常陸・下総両国では無く、武蔵国の国府内で起きていた幹部公務員同士の不和から或る対立抗争が起こり、それが将門の運命を大きく変える事件に発展するのである。是は不運としか言い様が無い。

歴史書と言っても正史では無く通俗史に属する「前太平紀」には「…ここに桓武天皇の曾孫、前将軍良将が男、滝口小次郎相馬将門と言う者あり、其の人と為り狼戻（ろうれい＝獣のように凶暴）」と書いてあるが、是は最初から将門を凶賊として書かれているので従えない。

先に登場した興世王が親戚同士の武蔵国司と意見が合わず公務に参加させて貰えなかった為に将門を頼って下総国にやって来たことから義侠心の強かった将門が是を受け入れた。それを契機として、トラブルを抱えた人物が次々と将門を頼って集まって来るのである。義侠心の強い将門は「来る者を拒まない」…それが将門の身を滅ぼす。　続く

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額 2,000 円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田　昇三　0299-22-4400　　兼平智恵子　0299-26-7178

伊東　弓子　0299-26-1659　　木村　進　080-3381-0297

編集事務局　〒315-0014　石岡市国府 4-3-32　（木村）

HP　http://www.furusato-kaze.com/